

初花

松岡隆子

いきなりの白れんの空拡ごれり
初蝶と声にして人ふり向かす
蔵の扉の開けあり水の温みそむ
もやもやと芽吹きの木々に囲まるる
一人づつ渡る土橋や木の芽冷

思ふこと言葉にならぬ鳥雲に
花冷の言葉短く別れきし
別るるも出あふも春のこととして
春日の墓はしづかに人待てり
初花のことを告げたく師の墓前
蟻穴を出てしばらくを花塚に
スカーフの風に解けて桜かな